

行けない空き地

タカハン

地獄と天国に共通する点は二つある。

- ・未踏性
- ・反復性

誰にも行けない、そこそが幻想だ。我々はいましばらくの間、そうした場所を思い、恐れては羨む事しか出来ない。

そして反復性。「同じような所業」が繰り返し人間に降りかかりまたは享受する。それだけが行われる、かの場所。それを恐れては羨んだり・・・我々にはやっぱり、向こうに対しては思うぐらいしか出来ないのだ。

違う点は？ 天国には資源が無限にあり、地獄にはただ無限だけがある。

\*

『RE/PLAY Dance Edit』が見せた地獄と天国。

この作品の上演に立ち会った観客の頭には、「反復」がくっきりと刻み込まれている。上演は終わっているけれども、風景はまだ続いている。観客はみな、上演風景を明確に思い描けるはずだ。それだけ、事件性の高い作品とも言えるだろう。背景の大きなホリゾン幕に重なる、ダンサー達のカラフルな影たち。繰り返される音曲。

ダンスの上演を通じて、人は通常行けない場所に足を踏み入れ、新しい景観を意識に招き入れる。

『RE/PLAY Dance Edit』の前半部は意味のない、肉体的にも負荷の少ない振り付けをしばらく踊り、ゴム仕掛けの玩具のゴムが切れたように倒れて横たわる・・・しばらくすると、頭の中には繰り返される光景と音楽。が、「暴力」だと呼びたくなるほど繰り返され、頭に叩き込まれる。それは全ての観客をして、演出の意味を洞察させては批評を喚起させるものであった。そうした内部的な分析や評論がひと通り終わったところでさらに繰り返される。飽きても同じ光景だ。それから30分程度は全く同じ光景を見たが、まだ繰り返される。

\*

だがやはり、終焉は訪れる。何度めだったか不思議なもので、「これが最後だ」と分かってしまったのだった。ダンサーの目から伝わったものがあったのだろう。後半部、ダンスの様相が変わり、内示するテーマも反転する。そこからはダンサーそれぞれが持つ技術をふんだんに生かしたパフォーマンスが始まる。ここでのダンサーの技術は素晴らしかった。

彼らの個性が光り、腕や足に鱗粉でも振っているとしか思えないほどすべての振りが輝いていた。まさ

に饗宴であった。

しかしここで注目したいのは、後半もやはり、前半と同じく「反復」が主題だった事だ。徒労に終わったゴムの踊りと、全てが叶えられた輝けるダンス。現金なもので、この作品の爽快な後味は、前半の塗炭の苦しみを綺麗に洗い流し、観る者に満足感どころか充実感を与えている。

\*

繰り返し同じ振り付けを踊ると書いたが、その構成を簡単にまとめると

1. 踊る。
2. 倒れる。
3. 立ち上がって踊る。

1～3のパターンが何度も繰り返される。ダンサーは舞台上を歩いたり走ったりの移動をする。ダンスの長さは大まかに決まっているようで、同じ立ち位置・フォーメーションが再生される。そのため舞台上の光景が目には焼き付いてしまい、飽和に襲われる。眠ってしまった観客もいた。さて、

2. 倒れる

これをダンスの間に間欠泉的に挟むのだから、それはいささか、ダンサー達の心臓に悪いのでは・・・と心配してしまった。ウォーキング中にこまめに休憩を取るのとは訳が違う。ただ、これほどまでに身体を酷使したダンスだからと言って、この作品の重大な衝撃が語れるとは言えない。そもそももっと過酷なダンスも他にあるだろう。

さて、

2. 倒れる

の時、ダンサーは死んでいた訳ではなく、息を整えて、目を開けてどこか一点を見つめていた。観客は彼らが立ち上がって踊り出す事を知っている。それは頭の中に刻み込まれ、また繰り返される事を知っている。何なら、数分後にどういう光景を見、そしてどういう鑑賞体験になるかを知っている。そこには鈍麻があり、快感は無く、可笑しみがあ、現実の血の臭いが漂う。観ている者にとっても過酷なのだ。この作品の事件性は、その繰り返しが過剰であり、過酷な飽和を通り越してしまうことにある。

\*

しばらくすると、四角く区切られた空間の中、肉体と苦痛が星雲を成して積み重なる。

物語が介在する余地もなく、その堆積は存在しながら進行していく。天国と地獄が本当にあるかどうかは知らないが、目の前に確実に存在し繰り返す。若干つまづいても進んでいく。眠っても変わらず踊り、前半が終わって全員で打ち上げ会場に移って後半に入って踊って、そして終演しても全員の頭の中で繰り返している。京都芸術センターの講堂いっぱい、ダンサーの動きの軌跡が刻まれ、あれから数日たった今でも、それぞれの脳にはそれがリフレインしていた。あの繰り返しは風になって消えてしまった訳ではなく、形を変えて続いている。

\*

地獄と現実に通ずる点はある。

上に天国があり、そこを目指しても良いという自由だ。しかしその方法は誰にも分からない。というか、巻き戻せない以上、一度に一つの手段しかとる事は出来ない。なんという不自由だろう。試行錯誤を繰り返すことしかないのだ。『RE/PLAY Dance Edit』は、繰り返す事への無限の肯定。繰り返す事を無限に描写し、それを見つめるのは無限に近づく行為だ。宗教者はそれを祈りという。

\*

私が鑑賞した上演において、個人的に最も盛り上がったのは、後半部の最後の繰り返しの一つ前だった。ダンサー達の目が最も輝いていた。ああ、あと2回で終わる・・・実際にダンサー達がそう思っていたかどうかは分からない。けれど、彼らの体が思っていることは、私の体も思った事だ。心よりも体の方が共感しやすい、それは日常生活でもよく思うことだ。そして最後の繰り返し、しかしなんと、ダンサー達の目の輝きがここで急速に消えていくのである。これは勝手な想像だが、終演に向けて思考が目に出た、という感じだろうか・・・いや、それはそれだけではなく、繰り返しが肉体を去った後に何が残るのか、当の肉体が抛り所を失くす事に怯えた、そんな気がする。終演を予感した時に劇場全体に去来した、いいようのない切なさ。あれは何だったのだろうか。

\*

繰り返し続ける光景。あれが何であったのか。それは誰も説明しきれない。けれど、定義は自分で決められる。

私はこう考える。

天国にも地獄にも行けず、地べたで、ゴム仕掛けのおもちゃのように同じ振り付けに依存して繰り返し、それ以外出来ない我々は一体、どれだけ悲しくて虚しい存在なんだろうか・・・だが、そうしていいのだ。ほかの方法が分からないままでも、何度でも、繰り返してもいいのだ。

繰り返しても良い。

---

タカハシ

京都の演劇人にインタビュー 頭を下げれば大丈夫

製作者 高橋良明

<http://www.intvw.net/>

[intvw.net@gmail.com](mailto:intvw.net@gmail.com)